P7　金沢沖の海底から発見されたイシイルカ頭蓋骨について

○山本　智（九州大学大学院比較社会文化学府）・平口　哲夫（金沢医科大学）

A skull of Dall's porpoise from the seabed off Kanazawa.

Yamamoto Satoshi (Kyushu University, SCS), and Hiraguchi Tetsuo (Kanazawa Medical University)

2001年7月8日，金沢沖水深約90mの海底でアマサギ（アマダイ）のこぎ刺し中の漁網に頭蓋骨と思われる骨片がかかった．この頭蓋骨は，船長本島征二氏によって金沢海上保安部に届けられ，平口に同定依頼された．当標本は脳頭蓋部分で，上顎部はほとんど欠如していた．化石ではなく，発見当時，イルカ特有の油脂臭が残っていた．手元にあるマイルカ，カマイルカ頭蓋骨とは異なる特徴を示し，写真判定ではネズミイルカ科に属するという見通しを得た．そこで，ネズミイルカ科の標本を所蔵する国立科学博物館の山田格氏のもとに当標本を送り，同氏を介して山本が同定作業を引きつぐことになった．

当標本は，吻部を欠いているが，鼻骨および鼻骨周囲形態からネズミイルカ科に属すると考えられる．後頭骨，側頭骨，頭頂骨，鼻骨は完全に保存されている．また，蝶形骨の底部，大翼，翼状突起，鋤骨の頭蓋底部が残されており，破損は著しいが前頭骨・上顎骨も一部残されている．本標本の特徴は，大きく尾側に張り出している後頭骨背側部，鼻骨，眼窩上部を形成する骨（前頭骨と上顎骨）の薄さ，鼻骨背側が垂直に立ち上がっていることである．

日本近海に生息するネズミイルカ科は，スナメリ，ネズミイルカ，イシイルカ（イシイルカ型，リクゼンイルカ型）の3種が知られている．本発表では，国立科学博物館所蔵のスナメリ，ネズミイルカ，イシイルカ標本を用いて，ネズミイルカ科の特徴をまとめ，当標本の同定を行なった．その結果，鼻骨周囲の立ち上がり，側頭骨の形態からイシイルカであると同定した．イシイルカ型とリクゼンイルカ型のどちらに属するかは，頭蓋骨のみでの同定は困難である．

リクゼンイルカ型は，北日本から千島列島にかけての太平洋沿岸で冬を過ごし，夏季にはオホーツク海の中央部へと回遊するらしい（Miyashita and Doroshenko, 1990）．イシイルカ型はリクゼンイルカ型の分布域を除く全域に広く見られる体色型である．日本海のイシイルカは，イシイルカ型の体色をもちオホーツク海南部を繁殖海域とするひとつの系群（日本海－オホーツク海系群）と考えられている（天野，1992）．

国立科学博物館の海棲哺乳類情報データベースに収録されている日本鯨類研究所制作の海棲哺乳類ストランディングデータベースによると，イシイルカの漂着は1975年～2001年の間に74件あり，リクゼンイルカ型あるいはイシイルカ型のどちらに属するか判明している漂着36件のうち3件のみがリクゼンイルカ型であった．

日本海側で報告されているストランディングで型の判明している24件のうち，北海道利尻郡に漂着した個体1件を除く23件がイシイルカ型であった．本標本が発見された石川県では9件あり，そのうち6件がイシイルカ型と同定されているが，残る3件は型が不明である．少ないながらリクゼンイルカ型の漂着報告あるいは記載があるので，日本海側にリクゼンイルカ型が生息している可能性は否定できないが，記載されている生息域，及び海棲哺乳類データベースによる漂着情報を検討した結果，本標本はイシイルカ型である可能性が高いと考えられる．

海底から採集される現生イルカの骨については，未報告のまま放置されてしまうことが多い．当標本は，採集した漁船員が人骨の疑いを抱いて海上保安部に届けたことが幸いし，専門家の同定をへて報告されるに至った．この種のデータも累積すれば重要な知見が得られる可能性がある．ご協力いただいた方々に御礼申し上げるとともに，人骨か否かにかかわらず，海底から採取された哺乳動物骨の専門的な検討機会が失われないように一層のご協力をお願いしたい．